様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5　月　10　日現在

機関番号：３４５１７
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009 年度　～　2011 年度
課題番号：２１５３０６３２
研究課題名（和文）　韓国地域児童センター実践による地域福祉力形成と貧困脱却・自立支援モデルの開発
研究課題名（英文）　Community Building through Social Work Practice in Korean Community Children Center and Independent Living Model Development for Poverty Families
研究代表者
前田　美也子（MAEDA MIYAKO）
武庫川女子大学・文学部・准教授
研究者番号：50309027

研究成果の概要（和文）：　アクションリサーチの方法により 7 年前に創設した韓国・釜山広域市影島区に初の地域児童センター（児童福祉法に基づく低所得家庭、ひとり親家庭の児童を対象とした放課後児童健全育成事業の通所施設）を拠点とした地域実践モデル研究を実施した。特に日本の研究助成により設立されたこともあり、当初から現在に至るまで地域で一定の注目を集め、行政機関等との良好な信頼関係構築も可能となった。登録児童及び家族の聞き取り・アンケート調査等により児童の心身の健康状態、日常の生活態度・マナー、衛生管理、学習態度、成績、プログラムへの参加、人間関係構築などにおいて当初から比べてポジティブな変容が確認された。第三者評価事業による評価結果も公表し、影島区では本センターを貧困脱却・自立支援モデル施設として認知されるようになった。

研究成果の概要（英文）：
By this action research project, the Dong San Dong Community Children Center, as a child welfare facility, was established in utilizing community practice model in social work 7 years ago in Yeong Do Ward, Busan , Korea. Particularly, an appreciative remark was extended to Japanese Grant-in-Aid for Scientific Research initiative support for this project which was well recognized as the demonstrative model for the Community Children Center in Korea. The results of evaluation and responses had been positively appeared in case analysis of children at the center, interviewing responses of children, in relating to physical and nutrition conditions, attitudes of daily, learning habits, enthusiastic attitude toward their participation in programs, manners, human relations were appeared to be positively much changed than initial evaluation of children at the beginning of the center. The practice model of this project utilized at the Community Children Center seemed to be fully understood and recognized by the Yeong Do Ward Director General had decided to adopt the same kind of independent living model for poverty families this project developed in implementation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：地域福祉力・地域児童センター

１．研究開始当初の背景

本研究の対象地域は釜山市内の低所得者層が政策的に集められた影島区東三洞であり、住民の約 60%が日本の生活保護にあたる国民生活基礎受給者である。市内の失業率はほぼ日本と同様の状況であり、研究対象地区には特に貧困児童家庭生活課題が山積していた。そこで、2004 年度から 2006 年度の科研費により問題解決のための拠点として 2005 年 3 月に貧困児童を対象とした地域児童センターを設立した。本研究は設立以降の継続研究にあたる。

２．研究の目的

釜山広域市最大の貧困地域に初めて設立した地域児童センターを拠点として、貧困地域の児童・家族に対する地域密着型の貧困脱却・自立支援モデルを開発することである。

具体的にはセンター運営に直接関与し、①児童の健全育成支援の効果測定、②当事者家族のプログラムへの参加促進とエンパワメント、③貧困問題解決に必要な地域福祉力の形成のためのアドボカシー活動の 3 点について、コミュニティ実践を通して実証することである。つまり、利用者のケース分析をはじめ集団・組織分析、サービスの連携・組織化・調整、福祉のまちづくりのための政策提言、サービス計画策定に向けた働きかけなど、ミクロからマクロまでの介入を行う。貧困地域開発/発展モデルに基づく地域福祉力の形成というメゾ・マクロの視点での実践と、センターによる児童と家族への直接サービス提供を行うミクロの視点での実践の二重的アプローチを統合した介入方法と戦略によって展開することが特徴である。

３．研究の方法

本研究は「地域福祉」「貧困・疎外」「子ども家庭福祉」「国際福祉」の 4 分野にまたがる複合領域であり、地域を基盤としたソーシャルワーク実践の応用研究でもある。

そこで、貧困児童家庭問題に対しアクションリサーチの方法を土台として、①文献による理論的検討、②サービス提供、ケース介入などフィールドでの直接的実践、③当事者、関係機関、協働体などへの聞き取り・質問紙調査による組織分析、という 3 つのアプローチにより問題点を明らかにする。

その上で、区内に存在する貧困児童問題に関連する多様なサービス組織体の構造的課題を検証し、貧困脱却と自立支援のための総合的なサービス供給システムを構築する。

４．研究成果

センター運営に携わり、直接的な支援と間接的な支援を行った。成果としては以下の点があげられる。第一に、貧困脱却・自立支援に向けた児童の健全育成支援及び保護者の意識と行動の変容にはセンターのリーダーシップのスタイルが一定の影響を与えていることが明らかとなった。この点はセンター長のリーダーシップの実情を児童、保護者、ソーシャルワーカー、本人、運営委員、行政の担当者などへの聞き取り調査及び第三者評価結果などにより分析した。

そこで、低所得地域における管理運営者としての資質及びリーダーシップのスタイルについて課題を明らかにした上で、専門研修、自主研修などの実施後、適切な時期を選択し、組織発展の諸段階において、センター長の交代を執行した。以上により、ソーシャルワーカー、保護者会、運営委員会などの組織整備

と調整を行った。

第二に、児童の健全育成支援のためのプログラム開発を強化し、新たに日本語学習・漢字学習・日本短期滞在による生活体験の機会を作った。つまり、児童の学習ニーズの充足度を重視する一方で、センターの理念・目的に合致しない学習・文化プログラムの修正・廃止・創設を行った。

このことにより、児童と保護者が現在の困難な生活問題を克服するために努力する姿勢が観察され、当事者家族のプログラムへの関心と参加度を高め、将来の生活設計に関する相談援助が可能となった。いわゆる児童を通した保護者のエンパワメントである。多問題家族については、定期的な個別面談と訪問相談、関係機関との連携、紹介を実施した。

利用期間の長い児童、保護者にとって、今やセンターは不可欠な生活の場＝居場所となっており、児童、保護者、スタッフがひとつの家族であるという表現が示された。

第三に、センター実践による地域福祉力の構築をめざすセンターの理念を啓発する手段として、ニュースレターの発行、パンフレット・リーフレットの製作、新たな看板設置、地域で各種文化発表会などへの参加を通して、広報力・発信力を強化した。具体的には、市の文化センターからの依頼により、プロの映画監督の指導により、センター児童が役者となって、いじめ防止をテーマとしたミニ映画製作が行われ、撮影前の準備から製作、発表までに関わった。

以上の広報活動の活性化は結果として、当初、貧困児童を対象とした本センターに通所することの恥ずかしさ、抵抗感、またスティグマ（社会的烙印）に悩んでいた児童が徐々にエンパワーされ、意識と態度の変容が観察され、所属感、プライドが生まれてきた。

つまり、低所得であったり、家族関係が崩壊していること、障害による学習・発達の遅れ、虐待・DV の被害などを理由として、学校でのいじめや冷やかしを受け、うつ状態やひきこもりがちになっていた児童が、それらの状況から脱却したいという気持ちに変わってきた。また、予想される問題を未然に予防すること、問題が発生した場合には、センター児童同士が学校内で学年を超えて助け合う意識が醸成されてきた。以上の段階を経て、近年では学内外での各種受賞、小・中学校で生徒会長に選出されるなど学校内でのリーダーシップを発揮し、自分の夢を持ち、語れるように変化してきた。

第四に、貧困問題解決に必要な地域福祉力の形成に向けてのコミュニティ実践を行った。ソーシャルワーカーへのスーパービジョン、集団・組織分析、サービス組織化・調整、政策提言などに関して、ミクロからマクロまでの介入を行い、貧困脱却・自立支援のためのモデル化に取り組んだ。直接的支援の成果としては、この３年間、毎年実施されたセンター事業に関する第三者評価で高得点を獲得し、モデル施設として認知されるようになった。また、影島区地域児童センター協議会を組織化し、本センター長が会長として選出された。

間接的支援の成果としては、研究者が提案した東三１洞（行政区）のまちづくり計画案が全国の自治体のコンペティションで最優秀賞を獲得するなど行政計画への影響を与え、「地域福祉力」の形成に向けての啓発を行った。現在では区の地域、児童福祉、文化交流に関するイベントなど招へいされるなど、地域発展のための実践研究機関としても認知されてきている。

結果として、2012 年度の 6 月には、ソウルで「世界貧困問題研究所」（外交通商省管轄の研究機関）が創設されることになった。そ

こで、釜山支部の研究所長として連携研究者が任命され、研究代表者には研究員としての依頼があった。7 月には釜山において新たな研究所の開所式とフォーラムが実施されることが決まっており、そこで研究者らが実践研究成果の一部を発表する予定である。

本研究テーマには、これまでに 2 回、計 6 年間の科研費によって取り組むことができた。日本では、児童福祉分野において、児童厚生施設である児童館があり、放課後児童健全育成児童の事業も存在している。しかし、それらの施設や事業は、貧困児童と家族を対象とはしていない。貧困や家族機能の低下に直面している児童への専門的な地域でのサービス機関は、現在の日本には存在していないということである。さらに、児童館や児童福祉機関では社会福祉の国家資格である社会福祉士や精神保健福祉士を有するソーシャルワーカーは必置規定とはなっていない。

一方、韓国では、貧困児童、ひとり親家庭の児童などを対象とする地域児童センターが児童福祉法によって設置されている。そして、センター長も直接の指導・支援者も韓国の国家資格を有する社会福祉士（ソーシャルワーカー）でなければならない。貧困児童への支援という専門性の視点でも、人材の適正配置という点でも法整備がなされ、政策が実行されている。

本研究の重要性と意義はまさにこれらの点にある。日本において貧困問題は社会福祉の原点であり、少子高齢社会において、喫緊の課題である。貧困児童・家庭の地域自立生活支援に関する実践研究は日韓共通のテーマであり、双方が学び合うことは多いといえる。本研究を通して、日本の社会福祉士、精神保健福祉士が必要とされる場は広がっているにもかかわらず、まだまだ法制度が未整備であり、児童福祉分野に専門職の配置が十分になされていないことがわかった。多様な社会問題、生活問題の解決のためには、日本の社会福祉の国家資格が、現在のような「名称独占」から脱却し、「業務独占」となるべきであろう。そのためのアドボカシー活動、ソーシャルアクションが今こそ、必要な時であるといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

① Sung Lai Boo、Advocacy はソーシャルワーク専門職の基礎です～歴史的視点から、医療ソーシャルワーク研究、Vol.2、21-30、日本医療ソーシャルワーク学会（招待論文）、2012、無

② Sung Lai Boo、前田美也子、Integration of Principles of TURE into a Model for Contemporary Social Work Practice in Korea、兵庫大学論集、15 巻、75-88、2010、無

〔学会発表〕（計　３件）

① Sung Lai Boo、Advocacy はソーシャルワーク専門職の基礎です～歴史的視点から、日本医療ソーシャルワーク学会（招待講演）、2011 月 9 月 10 日、兵庫大学

② 前田美也子、韓国における地域児童センター実践とリーダーシップ、日本社会福祉学会、2010 年 10 月 10 日、日本福祉大学

③ 井上浩、Sung Lai Boo、前田美也子、大学は地域福祉力向上のためにいかに資するのか？、日本社会福祉学会、2009 年 10 月 11 日、法政大学

〔図書〕（計　２件）

① 前田美也子、権利擁護とアドボカシー　加納光子・成清美治編著　相談援助の基盤と専門職　学文社 2010、104-119

② 前田美也子、Sung Lai Boo、オンダルセム物語～東三洞地域児童センターの実践、プスロギ図書出版、2009、1-119

〔その他〕（計　１８件）
主なアウトリーチ活動

① 前田美也子、Sung Lai Boo、地域福祉力による地域児童センター実践モデルの構想、児童自立支援とソーシャルワーク実践、影島地域児童発達研究所、1-7、2012

② Sung Lai Boo、前田美也子、鄭寧愛、地域児童センター・オンダルセムの活動の概要（ニュースレター）、影島地域児童発達研究所、2012
③ Sung Lai Boo、鄭寧愛、2012 年度地域児童センター・オンダルセム事業運営評価報告書（韓国語）、釜山広域市、釜山社会福祉開発研究院、2012、1-26
④ Sung Lai Boo、前田美也子、ソーシャルワークの力～ソーシャルワークの基本的信念と原則、Leftover Love Sharing Community、2012、韓国語 1-12、38-54、日本語 26-37
⑤ 前田美也子、スクール・ソーシャルワーク座談会、コーディネイター、兵庫大学生涯福祉教育センター、2011
⑥ 前田美也子、日本医療ソーシャルワーク学会、震災と医療ソーシャルワーク、公開シンポジウム・コーディネイター、兵庫大学、2011
⑦ 前田美也子、男女共同参画都市会議、意思決定参加分科会・コーディネイター、姫路市市民会館、姫路市男女共同参画センター、2011
⑧ 前田美也子、養父市男女共同参画プラン改訂に向けての留意点～国の第三次計画から、養父市役所、八鹿文化会館、2011
⑨ 前田美也子、Sung Lai Boo、貧困児童問題とコミュニティ実践、東三洞地域児童センター、2010、1-136
⑩ Sung Lai Boo、鄭寧愛、2010 年度地域児童センター・オンダルセム事業運営評価報告書(韓国語)、釜山広域市影島区、2010、1-25
⑪ 前田美也子、Sung Lai Boo、成人のリーダーシップ開発と地域の組織化、兵庫大学　生涯福祉教育センター　オープンカレッジ、2010
⑫ 前田美也子、地域コミュニティ再生と男女共同参画、男女共同参画推進講演会宍粟市、市民センター波賀大ホール、2010
⑬ 前田美也子、学士力を実現するための情報活用能力：社会福祉学教育、平成 22 年度教育改革 ICT 戦略大会、社団法人私立大学情報教育協会、アルカディア市ケ谷、2010
⑭ 前田美也子、地域で心地よく生きていきたい、おしゃべりらいぶらりー、明石市立図書館・明石不登校から考える会共催、明石市立図書館、2010
⑮ 前田美也子、男女共同参画推進の方向性～地域プログラム開発の視点から、宍粟市職員人権研修会、宍粟市役所、2010
⑯ 前田美也子、生きがいづくりと世代間交流、西宮市生涯学習大学「ラジオ講座」放送及びテキスト、西宮市、さくら FM スタジオ、2010、84-96
⑰ Sung Lai Boo、鄭寧愛、2009 年度地域児童センター・オンダルセム事業運営評価報告書（韓国語）、釜山広域市、釜山社会福祉開発研究院、2009、1-24
⑱ 前田美也子、近未来のスクールソーシャルワーク：はりま地域からの発信～教育・福祉・地域の連携を目指して、シンポジウム・パネリスト、スクールソーシャルワーク公開フォーラム、兵庫大学附属総合科学研究所生涯福祉教育センター、2009

６．研究組織

(1)研究代表者

前田美也子（MAEDA MIYAKO）
武庫川女子大学・文学部・准教授
研究者番号：50309027

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

Sung Lai Boo（SUN LEI BOO）
兵庫大学・生涯福祉学部・教授
研究者番号：60299138